二、熊谷三郎兵衛

慶安年間[註2]由井正雪の陰謀に加担した、一方の大将として知られる熊谷三郎兵衛は同士が切腹したり捕われたりした中を危く逃れ、途中詮議が厳しいので坊主に身をやつし、流れ流れて湯沢にきて花見沢の上に庵を結び世を忍んだといわれている。今もその辺を上人沢と呼んでいる。

こうしているうちいつしか南家組下の鎗術の達人斎藤強太夫と懇意になった。ある時なにかのはずみで議論の末、強太夫が坊主の癖にと罵ったので、同じ坊主でも貴様如きに負けるものか、武芸ひと通りの心得があると大言を吐いたので、ついに真剣勝負をしようということになり、八幡様の境内に篝火を焚き、強太夫は真鎗を取って向ったが、忽ち鎗を打落され、かえって軽挙を戒められた。この一事で只者でないことが知れ、だんだん様子を聞き三郎兵衛であることが判り、藩中の根本某の如きは三郎兵衛につき薙刀、火術、地雷の伝まで学んだが、火術地雷は子孫に悪用されることを恐れて薙方だけを家に伝え、明治維新まで根本家に熊谷流の薙刀の手が残っていた。

三郎兵衛の死後遺骸を清涼寺に葬ったが、公儀を憚って無名とし、散逸を虞れて近づくとおこりをわずらうという伝説がある。以前は山上にあったが、先年の出水で流れ落ちてきたが、暫くの間は『おこり』になることを恐れて誰も起すものがなかったといわれている（ゆざわ）。